

はじめに

マチュ・ピチュ(ペルー)、モン・サン・ミシエル(フランス)、タージ・マハル(インド)、アンコール・ワット(カンボジア)、ピラミッド(エジプト)、古代ローマの遺跡群(イタリア)、グラノドキャニオン(アメリカ)……。

いずれも日本人に人気の世界遺産である。その絶景は、誰もがどこかで目にしたことがあるに違いない。エキゾチックな異世界がもたらすときめきと非日常へのあこがれは、ときに心身の癒やしとなり、ときに明日への活力となる。情報化に乗って世界が急速に縮みゆくなか、これらユネスコの世界遺産たちはますます身近な存在となり、観光産業をはじめとした様々な分野で世界経済に取り込まれつつある。

しかし、ふと立ち止まってその内情をのぞくと、世界遺産が大きな曲がり角に來ていることに気づくだろう。

条約採択からほぼ半世紀、登録物件はすでに一〇〇〇件を超え、いまなお膨脹ぼうちようを続けている。世界的に認知度が高まる一方で、国際社会が団結して人類の至宝を守り後世に手渡すという原

点が忘れ去られ、むしろ副次的な観光や地域振興の側面ばかりがクローズアップされているように思う。

世界遺産を取り巻く環境は複雑さを増し、様々な課題や矛盾が表面化し始めた。国々の思惑が渦巻く登録合戦が常態化し、政治的な介入も日常茶飯事だ。国によっては登録数の多さを国威発揚や民族復興の証しとみなしてその獲得競争に奔走する風潮も否定しがたく、ユネスコが謳^{うた}う人類全体の財産という理想にはほど遠い。評価の難しい物件も目立ち始め、関係者はその審査に苦悩する日々である。

文化に軽重はないとは言うものの、西欧を中心とした登録数の地理的偏重は相変わらずで、富める国と持たざる国の溝は埋めがたい。アフリカやアジア、南米などの発展途上国はより多くの登録を求め、その圧力は国内の保存管理体制の不備にもかかわらず無節操な登録の乱発を許す原因にもなっており、むしろ遺産への脅威さえ招きかねない状況だ。世界遺産になったがゆえに伝統社会が維持してきた地域バランスが崩れ、かえって危機を生じさせた本末転倒なケースもある。

紛争地帯となると、さらに深刻だ。イスラム原理主義勢力タリバーンの支配下にあったアフガニスタンのバミヤンやユーゴスラヴィア崩壊後に激しい砲火にさらされた「アドリア海の真珠」ドゥブロヴニク(クロアチア)、最近では過激派組織「イスラム国」(IS)が侵攻したシリ

アのパルミラなどの例をひくまでもなく、国際社会が歴史遺産の大切さを叫べば叫ぶほど、民族の象徴でもあるそれらは敵対勢力の戦意をそぐための攻撃目標や駆け引きの材料になってしまう。残念ながら、ユネスコの掲げる理想が国際紛争の前に哀しいほど無力なことを見せつけられることも少なくない。人類の財産を守るはずの世界遺産システムが、逆に歴史遺産を危うくするとは、なんと皮肉なことだろう。

戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない――。

ユネスコ憲章(前文)の、有名な一節である。世界遺産条約もまた、これを究極の目的とする。しかし現実には、必ずしも理想どおりにはいかない。

なるほど、人類の歴史とは、発展とともに矛盾や争いの道のりでもあった。歴史遺産はその映し鏡だ。光があれば影がある。利益を享受する人々がいれば、必ず搾取される人々がいる。それを避けられないのが現実ならば、人類社会がいかにその状況に立ち向かい、課題を克服しながら前進していくかを、私たちは真剣に考えなくてはなるまい。それは数々の難題を抱える世界遺産がこれから歩む、いばらの道でもある。

本書では世界遺産の持つ明るい面よりもむしろ、ふだんあまり言及されることのない陰の部分に、あえて目を向けたつもりだ。わずかでも世論を喚起し、世界遺産の未来に向けてなら

かの指針になれば、筆者としてこれほどうれしいことはない。

私は一〇年余り前、『世界遺産が消えてゆく』(千倉書房)を上梓したが、あれから世界遺産を取り巻く状況は激変した。本書はその後の流れを取材し、自分なりに咀嚼そしゃくしてまとめたものである。前掲書の続編としてご覧いただければ幸いに思う。

目次

はじめに

第一章	世界遺産の光と影	1
-----	----------	---

1	失われた巨像の未来	2
---	-----------	---

2	条約のシステムと成り立ち	10
---	--------------	----

3	日本を取り巻く現状	29
---	-----------	----

第二章	世界遺産は生き残れるか	53
-----	-------------	----

1	多様化する遺産——「宗像・沖ノ島」が残したもの	54
---	-------------------------	----

2	噴き出す矛盾と課題	72
---	-----------	----

3	翻弄される世界遺産	107
---	-----------	-----

第三章 越境する世界遺産 131

- 1 ユネスコ条約と流出文化財 132
- 2 接近する無形遺産と有形遺産 149
- 3 悩める「世界の記憶」 175
- 4 水中文化遺産と保護条約 193
- 5 国内制度と世界遺産条約 215

おわりに 243

第一章
世界遺産の光と影



謎の遺跡ストーンヘンジ(イギリス)

1 失われた巨像の未来

バーミヤン、あの日

ユーラシア大陸の中ほど、アフガニスタン・バーミヤンの大地に立ったあの日から、はや十数年がたつ。



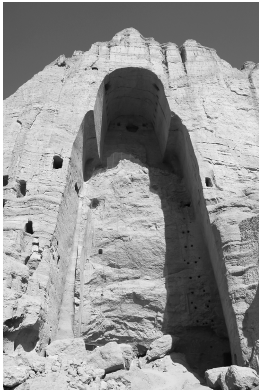
バーミヤン渓谷の全景(アフガニスタン)

二〇〇六年、私は破壊された世界文化遺産、バーミヤン仏教遺跡の修復作業を進めていた東京文化財研究所などの活動取材するためにアフガニスタンを訪れ、首都カブールから国連機でバーミヤン渓谷に降り立った。乾いた空気に、どこまでも澄み渡る青い空。ほこりっぽい黄色い土地にはささやかな樹木の緑が添えられ、シンプルかつ鮮やかなコントラストをなしていた。

眼前には垂直にそそり立つ断崖。一面に大小の窟が彫り込まれ、左右には飛び抜けて大きな二つの窟がある。かつてそこには釈迦と弥勒の巨像がそびえ、悠然とバーミヤン渓谷を見下ろ

していた。だが、私の目に映ったのはうつろな空間と、かつて仏の巨体をなしていたはずの無残な残骸だけであった。

アフガニスタンはシルクロードの十字路、東西交通の要衝である。アレクサンドロス大王が東方世界をめざし、チンギス・ハーンが西方世界の制覇を夢見た地では、いにしえより数々の異文化が行き交い、混じり合った。いまでこそイスラム社会となっているバミヤンだが、ここには三世紀から九世紀に繁栄した壮大な仏教遺跡群が残る。偶像崇拜を認めない地元のムスリムも、この巨像二体を、お父さん、お母さんと呼び習わし、愛着を持って接してきたという。宗教上の矛盾と葛藤を自分なりに昇華させ、ごく自然に整合させる生活の知恵が息づいていたのだ。



破壊されたバミヤンの西大仏

釈迦とされる三八メートルの東大仏、弥勒とされる五五メートルの西大仏。それを取り巻く一〇〇〇余りの、おびただしい仏龕群ぶつがん。孫悟空が大活躍する『西遊記』でもおなじみ、国禁を犯して求法の旅に出た唐の高僧玄奘げんじょうは、「梵衍那国」と呼ばれたこの地を訪れ、『大唐西域記』のなかで二つの仏像について「王城の東北の山

のくまに立仏の石像の高さ百四、五十尺のものがある。金色にかがやき、宝飾がきらきらしている。東に伽藍がある。この国の先の王が建てたものである。伽藍の東に鑰石の釈迦仏の立像の高さ百尺余のものがある。身を部分に分けて別に鑄造し、合わせてできあがっている」(水谷真成訳)と触れている。六二九年のことである。

くすぶる大仏再建論

かつて極彩色の仏たちの壁画で彩られていた仏龕群の内部は荒れ果てていた。経年劣化はもちろん、地元民の生活の場となったために煤すすなどで汚れたものも少なくない。壁画の八割が損傷したり失われたりしているとも言い、内戦ですさんだアフガニスタンの現実を映し出していた。

仏龕の壁面に、まるく切り取られた跡をいくつも見た。かつてそこには魅惑的な仏の姿があったことだろう。おそらくそれらは、闇の市場において高値で取引される流出文化財となり、国外に運ばれていったはずだ。そのいくらかは日本にも流れ込んだ。

イスラム原理主義勢力のタリバーンがバーミヤンの遺跡群を破壊したのは二一世紀になつてすぐ、二〇〇一年のことである。度重なる国際社会の制止にもかかわらず、彼らは大仏破壊という暴挙に出た。爆破に至るまでの詳しい経緯には謎も多いが、いずれにしても、歴史遺産が

いわば「人質」として駆け引きの具に利用される先駆けとなつてしまつたのは確かだ。

タリバーン支配の崩壊後、国際社会の動きは早かつた。イタリア、ドイツ、そして日本のチームがバーミヤンの修復に名乗り出る。戦乱の余韻さめやらぬ二〇〇二年にカブールで開かれた国際会議では、とりあえず大仏の再建問題は先送りに。技術論的な熟度に見解のばらつきがあつたのは当然として、少なからぬ関係者には、大仏の無残な姿に人類が犯した歴史的な過ちを留めておきたいとの思いもあつたのではなからうか。だが、その後に催されたパリやアーヘン(ドイツ)での国際会議で、再建をめぐる声が消えることはなかつた。

大仏の「足」

二〇一三年、予想もしない出来事が起こつた。破壊された東大仏の足元に、突如として二本の足首がドイツの手で造られたのだ。なんとも異様な光景だつた。

聞くところによれば、ドイツ隊は落石を防止するための屋根の土台だと言い張つたそうだが、写真を眺める限り、どう見ても「足」だ。将来の大仏再建に向けた布石とみられたが、その後、なぜか作業は中止され、そのままの状態で放置されているという。

だが、この出来事は先送りにされてきた、大仏再建は是か非かという難問の封印を解くことになつた。二〇一六年、イスタンブール(トルコ)での第四〇回世界遺産委員会では、アフガニ

スタン政府は少なくとも一体の大仏の再建を要請したといい、地元でも賛同する論調が出始めたようだ。

二〇一七年秋、東京藝術大学で国際会議が開かれ、再建問題をテーマに国内外の専門家八〇人が議論した。対象は東大仏。ここでは四つのグループがそれぞれのアイデアを提案した。

ミュンヘン工科大学やドイツイコモスのチームは、残った破片をつなぎ合わせて元の形を再現しようというシンプルな考え。歴史的記念物保護の基本理念となつているヴェニス憲章は臆測による無制限な復元をきつく禁じており、極力オリジナルの素材を利用してパズルのように組み合わせるべく、いわゆるアナステイロシスという手法である。ただ、ダイナマイトに吹き飛ばされた大仏のオリジナル素材がはたして何割遺存しているのか、大仏の面影が残る表面だけならばともかく、少なからぬ内部の破片の原位置を正確に特定することなど物理的に可能なのか、といった疑問が残る。ドイツ隊は当初から大仏の再建を考えていた節があるけれど、言うは易し行は難し、といったところか。

おなじくドイツのアーヘン大学は、基礎の上に骨組みを作り、その上に粘土を積み上げていく方式を提案。ただこれも、これだけ巨大な像だけに、その重量で変形しないかなど技術的な不安はぬぐえない。イタリアチームは、大仏の骨組みを組んで、そこに薄く削りだした大理石を貼り付けようとの構想。いかにもイタリアらしい芸術的な案だが、大理石の輝きを放つ大仏

とは、ちよつと想像がつかない。

一方、日本チームの提案は、いまはなき大仏の跡地をそのままにして再建は行わず、代わりに、丘の上の景観を損なわない場所に新たなモニユメントとして、強化プラスチックでミニチュア版の大仏を造つてはどうか、というもの。先の三つに比べればスティックで現実的、悪く言えば地味でいまひとつおもしろみがない。大仏だけなら約二億円、仏龕などを含めて周囲まで造り込めば一三億円というからそれなりの構造物だが、資金的に他を上回ることはあるまい。破片などを收容する博物館施設の建設も検討するという。人類が教訓とするべき負の遺産としての歴史的文脈に配慮した考え方とでも言えようか。

バーミヤンの未来

結局、会議の結論としては、「再建は破壊された遺跡または「構成」資産の顕著な普遍的価値（OUV）の保全と理解に寄与するものでなくてはならず、それに否定的な影響を与えるべきではない」と改めて釘を刺したうえで、さしあたって「大仏龕と崖の安定化、多国間の尽力の統合、破片の保護および展示や考古学的発掘、歴史的建造物の保存、教育および意識向上への支援」が喫緊の行動テーマとなった（「バーミヤン大仏の将来・技術的考察および真正性と顕著な普遍的価値に関する潜在的な影響」の結論）。

すなわち先の四案への具体的な決定はなく、いわば先送りの格好になったわけだが、拙速な議論は必要ないだろう。仮に再建となれば大事業である。そこに地域社会の十分な理解とコンセンサスが求められるのはいずれまでもないし、地元住民にもいろいろな声があるはずだ。ぶれることのない持続的な長期戦略には、地元コミュニティの総意にもとづく協力が欠かせない。でなければ、再び二〇〇一年の悪夢がよみがえらないとも限らない。

大仏再建をめぐる技術論の是非はもとより、この会議の提言が国や地元政府・共同体、市民社会および宗教指導者らの徹底的な話し合いを求めたように、まずは地元社会やアフガニスタン政府に的確な判断を促すための国内基盤の醸成とそのためのための内的な援助こそが国際社会のなすべき役割ではないだろうか。だが、対象の存在感が重ければ重いほど、破壊された歴史遺産への対応に国際社会は必ずしも一枚岩ではないし、様々な思惑と主張が交錯するものらしい。はたして大仏の「再建」は、バーミヤンの民が思い描くようなバラ色の未来をもたらしてくれるのだろうか。後述するようなデメリット、こんなはずではなかった、という事態があり得ないと言い切れるのか。いずれ来る決断の時に向けて、可能な限りのベターな選択をできるか否か、バーミヤンの将来は地元社会と国際社会の見識にかかっている。

シルクロードの夢、悲しい現実

二〇一六年、東京藝術大学陳列館での特別企画展で、東大仏の頭上、巨龕にかつて描かれていた極彩色の天井画が3Dデータを駆使して再現されていた。

四頭の天馬にひかれた馬車に太陽神が立ち、両脇には有翼の女神が寄り添う。ペルシャやギリシャ、インドといった異文化の要素が入り交じり、なんともコスモポリタな雰囲気だった。俵屋宗達たわらやむねたつの屏風画でおなじみの風神や、仏教で迦陵頻伽かりようびんがと呼ばれる半人半鳥もいる。前方のスクリーンには、四季折々のオアシスの風景とヒンドウークシの山々が広がり、大仏の視線で眼下を眺めた光景が大パノラマで展開していた。

あの日、大仏背後の岩盤にうがたれた回廊の窓から見下ろした溪谷が、私の脳裏によみがえった。いにしえのシルクロードの姿を夢想した来場者も少なくなかっただろう。確かにそれは、在りし日の大仏が千数百年間、見つめ続けてきた景色だった。

ただ、こんなのかな光景のなかにも、厳しく悲しい現実があることを忘れるわけにはいかない。あちこちに地雷が潜み、破壊された日常のおびただしい痕跡、放置されたままの戦車の残骸がゆつくりと時を刻む。地雷原をかくぐるように案内してくれたハザラ人の少年は、いまどうしているだろうか。風にそよぐ木立の並木道、陽光で黄金色に染め上げられた溪谷の朝は変わっていないだろうか。

大仏を再建するにしても現状を維持するにしても、現地の平穏と現実在即した議論の積み重

ねが不可欠なのを言うまでもない。「世界遺産条約履行のための作業指針」は、再建に臆測があつてはならないことを強調する。そこには可能な限りの詳細な考証、綿密で学際的な研究と科学的裏付けが求められるわけだが、現地ではそのための作業もままならない状況が続く。

アフガニスタンは内情が悪化し、本章の執筆現在も、外務省は全土に退避勧告を出している。バーミヤンには日本の修復チームも、二〇一三年を最後に現地入りできていない。

2 条約のシステムと成り立ち

忘れられる条約の原点

世界遺産の正式名称は「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」という。一九七二年に採択された、国際連合教育科学文化機関(UNESCO、ユネスコ)の国際条約である。締約国は一九三カ国に及び、人類遺産を様々な脅威から守り、後世へ伝えるための国際協力・援助体制の確立を目的としている。

ユネスコの条約で最大の成功例とも言われ、その名はすっかり社会に浸透した。旅行会社のパンフレットやテレビの旅番組のタイトルには「世界遺産」の文字が躍り、現地には観光客が押し寄せる。確かに、実に据わりのよいキャッチコピーだし、ただ漫然と世界の名所をめぐる